

第 11 回 IUPAC International Conference on Novel Materials and Their Synthesis (NMS-XI) 報告

2015 年 10 月 11 日から 16 日の日程で、新物質、新材料の合成と物性に関する科学と応用をテーマにした IUPAC の国際会議、第 11 回の International Conference on Novel Materials and Their Synthesis (NMS-XI) が、中国の Qinhuangdao (秦皇島) の Qinhuangdao International Hotel で行われました。会議のオーガナイザーの燕山大学の Faming Gao 教授と復旦大学の Yuping Wu 教授からお誘い頂き、熱測定討論会の直後、10 月 11 日の夜、大阪を出て 10 月 14 日までの短期の日程ですが出席してきました。この会議は、ポリマーを中心としていますが、無機材料、有機材料など様々な物質を対象にその合成、物性評価と物性解明を目的にしたもので、IUPAC の後援のもとで毎年、充実した招待講演者が参加されます。今回も、アジア各国、欧米の研究者を集めて行われました。アブストラクト集によると、28 カ国から参加者 220 名の参加者での開催とありますが、実際はもう少し沢山参加者があったように思います。中澤は、ナノセラミクス、電子材料などのセッションで「Phase Transitions and Low-Energy Excitations of Molecule-Based Superconducting Compounds」というタイトルで Key Note 講演を行いました。セッションでは、ZnO の欠陥の評価と光励起キャリアの移動度の制御、誘電相と磁性相を積層させた物質でのマルチフェロイック現象、GaN 上に SAM 膜をはった系での光誘起ダイナミックスのシュミレーションに関する研究など様々な分野の話がありました。物性のセッションは主として後半に集中しており、講義の予定で途中で戻らないといけなかったのが残念でした。グラフェン等に関する炭素系材料や、Li イオン等のバッテリー材料などの材料研究が、中国を中心にアジア各国では非常に盛んに行われていることを再認識しました。

この会議は、もともと高分子の合成と物性を中心に、中国の Yingyan Jiang 先生と大阪大学の Kenichi Takemoto 先生が開催されたもので、中国の主要都市をまわって開催されています。昨年このレポートで報告しましたが、2014 年は内陸部の鄭州で行われました。その時の黄砂の印象が日本からの参加者には非常に強く残っていたようですが、今年の Qinhuangdao (秦皇島) は、大連と北京の間にある渤海湾に面した半島で、海からの風が入るせいか、空が青く晴れ非常に過ごし易い場所でした。中国のリゾート都市でもあるようで、山海関という、万里の長城の東の端にあたり、長城が海に入る観光地でも知られています。また始皇帝が不老不死の仙人を探して滞在した場所として中国の中でも、長い歴史を持っている場所です。上海から 1 便の飛行機しかなく、日本からの参加者は皆、同じ飛行機で行き帰りも一緒でしたが、落ち着いた雰囲気の良い町でした。燕山大学のホールで開いてくれた歓迎のコンサートの写真です。私が分子研にいたころに総研大の博士課程の留学生として岡崎に来ていた学生さんと 15 年ぶりに再会しました。日本でしばらく助手をしたあと、アメリカで博士研究員をして現在、シンガポール大学の准教授で研究室をもっているとのことです。また再会を約束しました。会議の後に知ったのですが、彼は今回の会議で IUPAC の優秀な若手研究者の表彰者に選ばれていたようです。帰ってから、お祝いのメールを送ったところ、是非、大阪にも共同研究で来たいとのことです。

(中澤康浩)

未来” IUPAC第十一届国际新型材料及其制备会议专场晚会

